

あしなか

第参百参拾五輯 山村民俗の会

けさ園蔵唐より石神 同竹舎
と早書物もち事り居る名は
送り中よりてより去くは哉
席席のそり居ることづけと下波
能弥はまぐんそ持て居る名
海安神新り

田辺
監獄署内
東方能樟様
妻より園蔵へ
あつた
さかば便郵
進呈局刷印
行發省信遠

表紙 解説

◆表紙のハガキ（「南方熊楠顕彰館（田辺市）」所蔵来簡4649）
 については、本誌拙稿をお読み下さい。三三四輯の拙稿「南方熊楠と柳田国男の接点―『東京人類学会雑誌』の柴田常恵―」や本誌でふれなかったこと、その後知ったことを書いてみます。

◆西村亭『折口名彙と折口学』（昭和六〇年、桜楓社）に柳田国男と「東京人類学会雑誌」の関係が書かれています（一九四〇―二〇〇頁）。『柳田国男事典』（平成一〇年）の「南方熊楠」（中瀬喜陽稿）に「松枝さんのハガキ」にふれる所があります。『入監中ノ手記』を紹介されていますが、「ハガキ」の内容には言及されていません。『列伝妖怪学前史』（二〇二二年）の「坪井正五郎」（伊藤慎吾稿）の後注に、『本屋風情』の引用や飯倉照平の柳田と南方の『往復書簡集』の「I」章の解説文の紹介があります。この本は今でも書店で見ることができます。

◆「人類学者柴田常恵」の表現も見たことがあります。しかし、「考古学者として人生を終えた父」と柴田の息女の樋口恵子さんが書いています（『老いの地平線』令和五年、七五頁）。樋口さんは「ヨタヘ口期」の言葉を作られ、九〇歳代を謳歌されておられます。憶測ですが、「恵」の字は父親からの贈り物かと思っています。

（関 啓司）

あしな
第百参拾巻
目次

令和7年1月刊

〈表紙解説〉「南方夫人のハガキ」（南方熊楠顕彰館所蔵）……………関 啓司

岐阜・福井県境「面谷鉦山跡探訪記」……………驚 頭 隆 1

―江戸・明治・大正期に繁栄した鉦山の栄枯盛衰―

南方夫人のハガキ……………関 啓司 6

―熊楠さんは『石神問答』を自分で買った―

奥武蔵・奥多摩の「黒指」……………荒 井 俊 昭 11

―「サス」地名を訪ねて・その3―

〈旅の草ぐさ・37〉

津軽へ―海・山・温泉も、街・人も良かった夫婦旅……………菊 池 忠 明 15

新入会員紹介 19

会員異動 19

会員訃報 19

令和6年度収支報告 19

寄付御礼ほか 19

年会費七千円（原則前納です）

会費振込みをお忘れなく

二〇二五（令和七）年一月刊 非売品
『あしなか』第参百参拾壹輯 25-1
発行 山村民俗の会

編集 岡倉捷郎
印刷 （株）ヌーベル社

東京都千代田区神田神保町一六四
電話 〇三（三三九一）七〇〇一
乱丁、落丁の場合はお取り替えます